
僕たちの音-絆-。

からくれない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕たちの音 - 絆 -。

【Nコード】

N3410B

【作者名】

からくれない

【あらすじ】

―小さな町、鳴江町にある県内屈指の進学校、桜花学園での人と想いと過去が織り成す、『絆』の物語―

第一話 『僕』でなくなった日（前書き）

どうも、からくれないです。

書き直して新スタートです。

ですが、大まかなストーリーは変わりません。
展開がかなり前のと異なっています。

では、新話『僕』でなくなった日
どうぞ、ご賞味あれ（変

第一話 『僕』でなくなった日

あれは俺がまだ僕であつたころの記憶。

遠い遠い…けどまったく色あせることなく、深く深く、俺の心に根差した記憶。

また、俺の苦い思い出が俺への戒めであるかのように目の前に浮かび上がった。

…俺は朝の目覚めが最悪であることを覚悟した。



日本の東北地方のある場所に立っている孤児院。

そこで今から5年前、ある事件が起きた。

ある男による、大量虐殺事件。

当時中1だった俺の心の奥底に

いまだ癒えない傷としてある事件…

孤児院は赤に染まっていた。

「なっちゃん！逃げて！逃げてよっ！」

僕は叫ぶ。僕の大切な人へと向けて。

僕たちは孤児院の食堂にいた。僕の背のほつを見れば、外へと繋がる裏口のドア。

僕の前には僕をかばうようにして立っているなっちゃんの姿。

よく見れば体を小刻みに震わせていて、肩にかかった黒髪がはかなげに揺れている。

「（―怖いんだ…なら…なら…！　僕なんか庇わないで…にげよう

よ…）」

僕はそう思った。けど…

「…駄目、もう…。」

「なっちゃん…?」

「もう…きちゃってるよ…。」

こつ…こつと足音が聞こえてくる。

その音が僕らを追い込んでいく。もう少しであの男が来てしまう。

僕らが大好きだった先生を刺したあの男。先生は僕らを庇う為に刺されてしまった。

僕には何も出来ないのか…!?

そう思ったとき、僕はなっちゃんの前に出ていた。僕はなっちゃんを守りたかった。ただ、守りたかった。たとえ自分が死のうとも。

だから僕はなっちゃんの前に出た。

「なっちゃん、…逃げて。」

僕はなっちゃんを突き放すかのように言った。そうまでしても、僕はなっちゃんに逃げてほしかった。生きてほしかった。

「えっ…」

そんな僕の言葉になっちゃんは少し驚きを隠せないのか、僕の顔をはっと見上げながら呟く。

当たり前だ。僕は怖いと思いながらも強がり、その怖いという感情を顔に出さないように努め、きわめて無表情を装い、突き放すかのように言っただから。

なおも足音は僕らへ近づく。

もう、一刻の猶予も無かった。

…僕は、なっちゃんの手を握り、裏口へと走り出した。

「なっちゃんが逃げないっていうなら…無理やりにも…連れて行くよ。」

「菜緒（ナオ）くん…。」

僕は裏口のドアを開け、外へと逃げる。僕はちらりと後ろを窺（うかが）った。そこには手に血塗りの包丁を持ったあの男。
…目が合ってしまった。

「ハア、ハア、見つけたぞ…。あと…二人。」
あの男が呟（つぶや）く。すでに目は狂気じみでいて、焦点がうまく定まっていないようだった。

「くそ…。」
僕は軽く舌打ちをし、土の地面を蹴る。なっちゃんの手を決して離さないようにしっかりと握りしめ、地面を蹴った。

僕は生い茂る木々の間を走った。後ろを振り向かず、走った。いつ終わるとも知らない、誰かが作った獣道を逃げて、逃げて、木の根っこで足元をすくわれそうにながらも、逃げた。

10分ぐらいだろうか。今まで木々しかなかった視界に、覆いつくすような黒と月光にさらされた一本の桜の木が入ってきた。
だがそれ以外僕の視界に物は映らなかった。目を凝らしても空を覆いつくす黒と青白い桜の木しかなかった。

…一陣の夜風が僕の湿った頬をヒヤリとさせた。
それは肌にまとわりつくような夜風だった。
いや、海風だ。

僕らの目の前には一本の桜の木と空へと繋がる崖があったただけだった。

「（このままでは追い詰められる!）」
そう僕は本能的に思い、僕は方向転換を試みようとした。しかし後

ろを振り向くと、もうすでにあの男がそこにいた。

男は僕らを見て、悪魔のごとき形相でニヤリと口元を吊り上げ、じりっ、じりっ、と男は僕たちを追い詰める。

お互いの距離はもう2メートルぐらいまで縮まっていた。

僕らに逃げ場はもう無く、横に逃げて、後ろに逃げて、その先には僕らを待ち構えているように崖がただあるだけだ。

夜風で乾いた頬がまた湿った。

…冷や汗が流れ落ちた。

そして夜風がまた僕の頬をヒヤリとさせながら乾かした。

「…ハア、ハア、…お前らも…逃がさん…、一人残らず…殺す！」
もはやあの男は正気ではなかった。あの目は人を見る目じゃない…
獲物を見つけた獣の目だ。

僕らはまた一步、また一步と下がる。もう崖までは3歩も無いだろう。

…結局僕は何も出来なかったのか？

僕は悔しさのあまり、ぐつと歯を噛み締める。

その時、僕の手がぎゅつと握られた。一人の女の子が僕にすぎるようにぎゅつと手を握った。

「菜緒くん…。」

…そうだ。まだ諦めちゃ…いけない。何か…何か、あるはず…。

そう考えたとき、僕の頭の中にひとつだけ手が浮かんた。助かる確率はきわめて低いだろう。けどこれしか今の僕らには手が無かった。

僕が最後に考えに至った時、男の包丁を持つ手が振り上げられ—

「…ハアアッ！」

—振り下ろされる。

「菜緒くんっ！」

その瞬間、僕は、僕にすがってくれた女の子の手を振りほどき――

<ドンッ！>

――崖から突き落とした。

そして僕の体は赤色に染まった。と同時に体を引き裂かれるような痛みが走る。

僕は朦朧とする意識の中で、

「（僕にもつと力があつたら……。）」
そう心に呟いた。



…僕は光の中にいた。

ただ、真っ白い…一片の陰りも無い白の中にいた。

僕は体を動かそうとした。

すると、視界が移動した…ように思った。

僕はあても無く、光の中をただ進む。進むというよりは視界を動かすといったほうが語弊が無いかもしれない。

どれくらい進んだだろうか。

この世界に変化が起きた。光がより満ちたのだ。その光の強さはまぶしいとさえ感じられた。

僕はその光を追い求め、さらに前へと進む。

進めば進むほど、世界は光に満ちていく。

そして――

光がはじけた。



気がつくと僕はさっき僕が斬られた場所に立っていた。

『まぶしい……。』

上を見上げれば、突き抜けるような青があり、僕の体をじんわりと光が照らした。

僕は不思議に思った。

『何故生きているのか』と。

とりあえず自分の体を見た。

…何の異変も無い。体がちゃんとあった。傷ひとつ無く。

…そう、傷すらなかった。

その代わり僕の立っているその下に――

――血で染められた服を着た『僕』が横たわっていた。

驚き、僕はとつさに『僕』から離れようとした。

<ふわり……>

僕の体はごく当たり前かのように宙に浮き、空に包まれた。

僕は悟った。

「ああ、そうか…、僕は…
幽霊になったんだ。」

第一話 『僕』でなくなった日（後書き）

前とかなり違っています。

前のこの話を読んでくれた人はお気づきでしょうが、今回、主人公が幽霊になっちゃいました。

実は前のやつでは物語の最後に主人公は実は幽霊だった！

とやろうと思っていたのですが、

物語を練り直しているうちに新たなアイデアが生まれまして、このような感じになりました。

指摘、誤字脱字報告、感想、なんでもいいです。

何かありましたら、コメントをしてください。

では、次回の更新は

2 / 3 ・ 4 土日 になると思います。

もしかしたら早くなるかもしれませんが。

ではでは、これからよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3410b/>

僕たちの音-絆-。

2010年10月11日04時39分発行